

令和5年度授業改善推進プラン

学校名 西東京市立保谷小学校

校長名 加納 直樹

1 調査結果を踏まえた本校の状況

6年児童は、何事にも関心意欲が高く、授業に積極的に関わる児童が多い。算数少人数授業では、下位の児童に対しては、身に付いていない既習事項への興味関心をもたせ、丁寧に指導しながら、当該学年で理解する基礎的な学習内容を指導している。中位・上位層の児童の状況に合わせて基礎的な知識や技能を活用した授業を重視している。今年度実施した全国学力テストの結果では、国語は、「読むこと」は全国より平均正答率が高いものの「思考・判断・表現」「話すこと・聞くこと」「書くこと」は全国・東京都より低い。「読むこと」は、校内研究での取り組みや読書活動を重視してきたことの成果と考える。

算数では、全国平均程度の平均正答率を得ている。しかし、「思考・判断・表現」「図形」では、全国・東京都の平均正答率と比べると他の領域よりもやや下がっている現状がある。

下記に示す課題を解決していく必要がある。

国語：【知識及び技能】

- ・修飾と被修飾との関係、主語と述語との関係をとらえる。
- ・漢字を文章の中で正しく使う。

【思考力、判断力、表現力】

- ・目的に応じ、文章と図表を結び付けて必要な情報を見つけ、論の進め方を考える。
- ・中心となる語や文を見付けて〇〇字以上〇〇字で要約する。

算数；【数と計算】

- ・商が1より小さい除法ができる。
- ・倍の意味を「基準量を1」としたときに幾つにあたるかを考える。
- ・時刻・時間の計算ができる。

【図形】

- ・三角形の面積を求める。さらに、複数の図形を組み合わせた図形の面積の求め方を考える。

【測定】

- ・目的地に行くための道のりの求め方を式や言葉を使って説明する。

【変化と関係】

- ・速さの意味が理解でき、速さの問題を解く。1当たり量を考えて問題を解く。

【データの活用】

- ・グラフの1目盛りの大きさを求める。

【思考力、判断力、表現力】

- ・目的に応じ、文章と図表を結び付けて必要な情報を見付け、解き方を考える。

2 教員組織等の状況

昨年度より、会議1を学力向上委員会と生活指導委員会の二つの委員会に組織替えをして、各委員会の人数を多くした。学力向上委員会で、校内研究、OJT研修等で授業力を高める取組と個別学習（前年度に習う算数の内容）・拡大個別学習（当該年度に習う算数の内容）で補習を行う。また、授業規律を徹底し、学力が高まる授業を実践するために生活指導委員会が中心となって規範意識の向上に取り組んでいる。

課題については職層を意識した連絡・相談を徹底すること。特に学力向上については、経営・運営会議で概略を確認して、学校全体に学力向上委員会が中心となって、全教職員に浸透させている。

3 地域の状況

本校は、創立149年の伝統校である。児童の祖父母も保谷小学校出身など、地域に根ざした学校であり、学校の教育活動に対して大変協力的である。また、地域の子ども食堂は児童の学習の場として支援をしていただいている。新たな教育改革を行うためにPTA代表委員会や学校運営協議会等の各種地域との会に管理職、教員が積極的に関わり、連携を深めている。

また、今年度からコミュニティスクールが始まり、地域学校協働活動等と連携をしながら、学力を始め、子どもの心を豊かにしていく取組を推進している。

4 前年度までに行った学力向上に係る取組を踏まえた本校の状況

① 全学年、放課後に週3回、個別学習時間を確保し、東京ベーシックドリルを活用して前学年の算数の習熟の徹底を図っている。また、月1回、6時間目等を拡大個別学習時間として設定し、現学年の課題を抱える児童の基礎学力向上を目指している。

【東京ベーシックドリルによる算数平均正答率7月現在】

低中学年では、7・8割の正答率である。高学年になると学習内容が難しくなり、正答率も下がる傾向がある。

② 昨年度までの校内研究では、国語科を中心とした「対話活動の定着と手立ての充実」に取り組んだ。児童の行動目標を作成し、課題を明確にして主体的に学びにかかわらせるような、学級経営的な視点による研究も行ってきた。課題として、一人一人の学びの深まりや対話の効果に差が生じたことや、ICTの効果的な活用ができなかったことが挙げられた。

③ 特別支援教育の視点（視覚化・焦点化・構造化）を取り入れた指導法の習得及び導入と山場を意識した授業展開を行っている。

④ 本校児童の児童質問紙による調査に関しては、東京都や全国平均を上回る回答が多かった。

「将来の夢や目標をもっている」「人が困っているときは、進んで助けている」「学校に行くのは楽しい」「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考える」「話し合う活動を通して自分の考えを深めたり、広げたりできる」などは東京都・全国平均より高い。心が育っている様子が数値からわかる。しかし、「自分の考えをまとめ、発表する場面」「友達と意見交換する場面」などでPCやタブレットを活用した学習に課題があることがわかった。PCやタブレットを活用した学習を推進して、より一層学習の成果を大きくしていきたい。

5 本校で取り組む学力向上策

- ① 個別学習時間・拡大個別学習時間の指導の充実を図るために、指導者として担任に加え、専科教員も指導に入り、全校体制で基礎学力の充実を図る。
- ② 算数で学ぶ基礎的な知識・技能の定着を図るために、基礎・基本に関わる掲示物を教室・廊下に掲示する。
- ③ 水曜日の給食後に全校でeライブラリー実施の時間を設定し、既習事項を復習する。また、授業や家庭学習の課題としてeライブラリーを積極的に活用する。また、確認テストを活用して教員が児童の課題を把握する。
- ④ 今年度の校内研究では、研究主題を「自分ごととして課題を探究する児童の育成」として、児童自らが課題を発見し、ねばり強く、楽しみながら探究していくような、児童の学びに向かう姿勢の向上を目標に掲げた。総合的な学習の時間の「ふるさと探究学習」を中心に、児童自身が選択・決定する機会を増やしたり、児童の思いや考えから出発するような授業を増やしたり、ICTを積極的に活用したりする中で、地域・保護者を巻き込んだ、未来を生き抜いていくための生きた学力の向上を力強く推進していく。
- ⑤ ICTの効果的な活用に関しては、効果的かどうかはひとまず置いて、とにかく使う、積極的に活用することを徹底して行うこととしている。
- ⑥ 特別支援教育の視点を取り入れた指導法の習得（視覚化・焦点化・構造化）及び導入と山場を意識した授業展開を行っていく。
- ⑦ 全国学力調査の結果を基に、児童の誤答が多い問題は、学力向上委員会が誤答の傾向や原因を分析し、改善策を考え、全教員で共通認識をもつ。

6 具体的な授業・指導の改善のポイント

国語の指導は 聞くこと話すこと・書くこと(漢字含む)・読むことと指導は多岐にわたるが、本校児童の課題から考えると、子どもたちが説明文の学び方とか読み解き方を身に付ける必要がある。学習指導要領の指導事項を学年順に整理し、きちっと理解するとよいと考える。まずは指導する教員自身が皆そのことを分かっていることが大事かと思う。

- ①段落番号をふる。段落に小見出しを付ける。段落冒頭のつなぎ言葉に着目する。
- ②時間の順序 出来事の順番がわかる。 はじめ～なか～おわり
- ③論と例 説明と例え まとめた言い方と具体的な話を理解する。
- ④関係を表す言葉「～ということは」「そうだったのだが、」「つまり～」が分かる。

とは言え、やはり全ての教科における資質能力の育成や学習基盤となるものは言語能力であり、語意を豊かにすることは何よりも大切である。 そのために、全校で俳句に取り組みさせている。

算数の指導の第一の目標は、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるということ。計算ができる・量の単位や測定ができる・数量の関係を捉えられる・平均や確立などデータの活用ができる…これらは日常生活に必要な知識・技能であるから、解答の正確さが求められる。そのために、「はやく・かんたんに・せいかくに・どんなときも」解けるより良い方法を導き出すことが算数的活動の

楽しさと考える。特に算数においては、系統性が大切である。

1年生で100まで数えられ、2年生で4位数の構成と位取りを理解し、九九を覚える。3年生で分数・小数の意味と相対的な大きさを理解し、4年生で十進位取記数法の学習が完成し、概数で表せるようになり、分数小数の足し算引き算ができるようになる。それが5・6年生の割合や分数の掛け算割り算につながっていく。だから、どの学年でも取りこぼしてはダメな教科である。次の学習につなげるために、その学年でその内容を必ずわかるようにしてあげる必要がある。授業で言えば、「前時までの既習事項の復習→これまでに学んだことを生かし、今日の課題が解決できるかやってみる→よりよく課題解決ができる方法を見付け出す→適用問題で知識・技能を確かなものにする。」これが一単位時間に全部含まれているのが算数のいい授業だと考える。

理科の実験や理科観察の指導は、基本的には観察力と推論力。これは、**社会科**でも同じである。社会科は基本的に、事実認識→関係把握→価値判断。という流れを体感できていること。

理科はそれに比較対照実験、仮説検証実験のポイントを身に付けることが求められる。

- ①事象→疑問→課題(問い)→仮説→実験方法の工夫→実験・観察・記録
- ②結果→考察→結論→問いを解決
- ③実験装置のセッティングと安全確保のための各種方策。

体育科の指導は指導要領の考え、運動(題材)の特性、児童の実態をよく踏まえた授業をすることが重要である。

- ①できないとつまらないし、悲しいし、やる気が出ない
- ②できないと恥ずかしいし、怖いし、逃げたくもなる
- ③だから、できないと嫌いになる。これでは生涯体育につながらない。
- ④できるようになったという感覚に加え、たとえできずとも運動が楽しい・気持ちいいという感覚を実感させることが最も重要。個に応じた指導のポイントと声掛けをすること。
- ⑤自分の生活のすぐ隣に運動がある。そんな人生を過ごさせることを目指す。

7 最後に

まず、教員一人一人が自分はプロの教師であると自覚してもらいたい。教える内容について理解していることは教師として当たり前である。そして子どもの学習活動は児童の実態を考慮し計画し、どんな教え方をするかというより、どんな学習活動をさせて、どのように学ばせるか、を考える。ここは、教師の話を集中して聞かせるといった学習活動があってもよい。子どもが「〇〇したい!!」と思える授業、もっと学びたい、もっと話を聞きたい、もっと知りたい、もっとやりたいと…目の前の結果だけにとらわれず、大切なものを育てる気持ちをもってほしい。自ら学び続けることのできる子どもを育てていくには、勉強を教えるのではなく生き方を教えるべきだと思っている。